慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	価値の多元主義としての生の形状説
Sub Title	The shape of life hypothesis as value pluralism
Author	長門, 裕介(Nagato, Yūsuke)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2019
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.12, (2019.) ,p.161- 177
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20190000-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

価値の多元主義としての生の形状説

長 門 裕 介

序

現在、福利の概念の説明に関する立場の一つとして「生の形状 shape of a life」からの議論が流行している。生の形状説は、私たちの生の価値ないしその生に含まれる価値は瞬間的な（ある特定の時点切片に）福利の総和に還元できない全体としての価値が存在すると主張する。容易に想像されるように、この議論は福利というものを快楽主義と集計主義のコンビネーションから説明しようとする古典快楽主義的な傾向と対立するものとして捉えられ、論争を巻き起こしている。論争の焦点は、生の形状からの説明は、（直観的に理解しやすいその見た目とは裏腹に）「それは果たしてなんの説明なのか」という点に決定的なあいまいさを残していることに存している。なぜ生の形状説は快楽主義と対立するのだろうか。生の形状説は善き生についての私たちの信念になにを付け加えるのだろうか。

本稿の目的はこの問いに答えるための手がかかりを探求するものである。これは次のように行われる。まず第一節では生の形状説の基本的なイメージを得るためにノージックの議論を紹介する。第二節と第三節では、生の形状説についての内在的解釈と物語的解釈という可能な二つの解釈を提示する。第四節では、物語的解釈においてこれまで詳細に検討されてこなかった「意味の変化」という概念を適切に説明することを試みる。最後に、第五節では、物語的解釈の独特の含意を指摘し、実践的な含意を引き出すことを試みる。

1. 導入：ノージックの挑戦

本稿の狙いを明確にするために、ロバート・ノージック『生のなかの螺旋』における次のような一節を確認することから始めよう。

> 誰かの一生を通じたすべての幸福をグラフに表すことにしよう。［得られる］幸福の量を垂直軸に、時間を水平軸にとる。（中略）もしもただ幸福の総量だけが重要なのであれば、恒常的に増大する幸福と恒常的に減少する幸福、つまり上昇曲線と下降曲線との違いについて、その幸福の総量、すなわちその曲線の面積の全面積が二つの事例で同一であった場合には、私たちは関心を抱かないことになるだろう。けれども私たちのほとんどは上昇曲線の方を下降曲線よりも好むだろう。つまり、幸福の減少する生よりも増大する生を好むのである。［Norzick 1989, 100］

この一節それ自体がそれほど理解困難だというわけではないだろう。私たちの多くは、自分の人生がいわば「右肩上がり」の形状を為すことを望む。では、ノージックはこの一節において単に私たちのもつそのような選好の存在を指摘しようとしたのだろうか。おそらくそうではない。ノージックの指摘の眼目は、善き生に関する私たちの内部的な見方において幸福（福利）だけが唯一の重要なことではない、と主張することにあった（有名な「経験機械」についての思考実験がこの引用の直後に登場することを思い起こしてみるべきだろう）。

ノージックのこのような論法は現在「生の形状説」として価値や福利の哲学的議論においてしばしば引き合いに出される。しかし、一見した理解のしやすさとは裏腹にこの説はなお議論の余地を残しているように思われる。なぜ右肩上がりの生の形状はそうでない場合よりも私たちの生をより善くするのか。あるいはこの説は幸福に関する私たちの素朴な見方のど

の部分に対して改訂を迫っているのだろうか。このことが明らかになれば「（福利としての）幸福が私たちにとっての唯一の重要なことではない」とするノージックの見解やその擁護者たちの立っている場所が一層よく見えてくるはずである。

2. 福利の反目的論としての生の形状説

現代の倫理学において、一般に福利 well-being とは個人にとってそれ自体で（つまり、内在的に）善い非道徳的な価値として考えられている[1]。では私たちの生全体を善いものにするのは具体的にはなんなのか。この問いへのもっともシンプルな答えとして私たちはさしあたり次のようなものを考えることができる。それは、私たちにとっての内在的な非道徳価値の基本的な担い手は快苦を基本とした心的状態のみであり（快楽主義）、ある期間に経験された価値は個々に経験された瞬間的価値の総和である（集計主義）とする価値の自然主義的快楽説をもとにして、当人がその人生の各部分で得た価値の総量を集計すればよい、とする考えである。この考え方に従えば、例えば、ある個人にとってある時点 x における快の総量が a、時点 y における快の総量が b であった場合、その個人にとって時点 x と時点 y で得た福利は a+b のように表現できる。そしてこれが人生全体にも適用されるのである。

人生全体の善さについての以上のような考え方は、スキャンロンが価値の目的論と呼ぶものの一種である［Scanlon 1998, 79-80］。価値の目的論とは、（1）価値とは事態または世界の在り方のもつ性質であり、（2）ある事態が価値をもつとは、その事態が実現または促進されるべきであるこ

1　本稿では福利 well-being と厚生 welfare を「個人にとってそれ自体で善い非道徳的価値」を指すものとして同じ意味を持つものとして扱う。論者によっては福利ないし厚生と賢慮的価値 prudential value は同じものとして扱われることもあれば、そうでない場合もある。

とに等しい、とする理論である。自然主義的快楽主義にとって、価値の担い手は心的事態であり、そこに含まれる快苦は常に現在形で生じるので、ある期間の個人にとっての良さはその期間に含まれる各時点で得られた快苦を単純に集計することが許されるのである。

これに対する定番の攻め手はあらゆる価値が純粋に集計的ではないことを示すことで為される。ラリー・テムキンによる以下のような事例を考えよう。彼は人生を五つの期間に分割できるとして、各期間で得られる福利がそれぞれ時系列順に 10、30、50、70、90 である場合と 90、70、50、30、10 である場合を比較した場合、どちらのほうがより善い生だろうか。彼は前者の生がより善いことは明らかであると考え、これによって各人の生の時点間に配置された福利の総量が同一であったとしても、その福利の布置 pattern や傾向 direction といったものが決定的に重要になる側面があることを示そうとした［Temkin 2012, 111］。

この論法がノージックの出した例と全く同じであることは明らかだろう。テムキン自身の文脈では、個人の生の内部において福利がどのような布置で分配されているかということそれ自体がある種の価値をもつことを認めるのであれば、個人間の福利の分配のされ方（個人の間にどれくらい格差が生じているか）に非個人的な価値である平等の価値が存在するとする平等主義の動機はそれほど奇妙なものではない、という仕方で生の形状説は持ち出される。だが、ここでは議論を個人の生に限定することにしよう。このとき次のようなことが問題になる。この右肩上がりの生がそうでない生より善いものであるとして、福利の単純な集計に現れてこない価値、つまり右肩上がりの生に軍配を上げることを可能にしている価値とはいったいどのような価値なのだろうか。

これについてのテムキンの答えはいささか曖昧であり「生の形状が重要でありうるという主張はある種のホーリズム論者やゲシュタルト心理学者、有機的統一、すなわち全体は部分の総和より大きく（あるいは小さく）ありうることの擁護者の考察に共通する洞察と軸を一にしている」

［Temkin 2012, 112］と述べるにとどまっている。テムキン自身の意図はさておき、人生の形状説は「全体は部分の総和より大きくも小さくもなりうる」ことを前提にした理論であるとして、さしあたり次のような解釈を考えてみることができるだろう。「全体は部分の総和より大きくも小さくもなりうる」とは全体という実体がそれ自体で内在的な価値をもつということである。これは目下の問いでは「福利の分配の布置が右肩上がりである」という事態がそれ自体として（内在的に）価値をもっていることを意味している。これを人生の形状説についての「内在的解釈」と呼ぶことにしよう[2]。

内在的解釈によれば生の形状説は自然主義的快楽説と両立しえない。自然主義的快楽説において唯一の内在的価値である快楽は常に現在形で、つまり時間中立的に生じる。快楽が生じた時間的位置そのものは人生全体の価値評価に影響を与えない。しかし、内在的解釈はそれらの快楽の時間的分布それ自体にも内在的価値を認めるので、仮にこれが正しいとしたら自然主義的快楽説の重要なポイントである集計可能性は脅かされることになるだろう。

しかし、「右肩上がりであることそれ自体に価値がある」とする内在的解釈は本当に説得的だろうか。ダール・ドーシーはこの解釈を次のような例を持ち出して批判する［Dorsey 2015, 315-319］。

- 週末 1：金曜日、あなたは友人の家のパーティーに招かれて楽しい時間を過ごした。しかし、いささか酒を飲みすぎたせいで土曜日は台無しになり、日曜日にようやく少し回復した。
- 週末 2：あなたは木曜日の夜に飲みすぎたせいで金曜日はずっと気

2　この呼び方は［Dorsey, 2015］に倣った。なお、ドーシーは次節で述べる物語的解釈（彼が the Relational View と呼ぶもの）を生の形状説に関する最も魅力的な解釈としつつ、集計可能性を必ずしも脅かすものではないとする。この論点は興味深いものだが、本稿では扱うことができなかった。

分悪く過ごさなければならなかった。しかし、土曜日には少し回復し、日曜日には友人の家で楽しい時間を過ごした。

週末（つまり金曜から日曜）に焦点を絞って考えた場合、この二つの週末を構成する出来事は同じものであるが形状は全く異なるものになる。このとき、内在的解釈を採用するのであれば私たちは週末 2 のほうをより善い週末であると言わなければならない。もちろん、そのように述べることを妨げる理由は何もない。しかし、ここでの週末 2 の善さは右肩上がりの人生の善さほど直観的な説得力を持つだろうか、とドーシーは問う。人生全体やそれに比するほどの長期間の区切りにおいては説得力を持っていたはずの例が、週末のような短期間となればそれほど説得的ではなくなってしまうのではないか。私の見るところ、この批判は他愛のないものではなく、生の形状説が真に説明しなければならないことについての示唆を含んでいる。それは「右肩上がりである」ということが人間の長期間の活動において実のところどのような意味をもつのか、という問いである。次節では内在的解釈とは異なる生の形状説の解釈を見ることでこの問いに答える道を探すことにしよう。

3. 生の形状の物語的解釈

ディヴィッド・ヴェルマンは、生の形状説は単に右肩上がりの生の方が右肩下がりの生よりも良いということではなく、私たちがある期間内に経験する価値のなかには異なる時間に生起した出来事の間の関係に本質的に重要なものが含まれている場合があることを示唆する議論であるとする解釈を提示している。このことは次のような例によって示される［Velleman 2004, 65-66］。

・ケース１：ある女は結婚以来、夫との不仲が続いており苦しい忍耐

を続けていた。結婚からちょうど十年が経ってから彼女は離婚を決意し、すぐに別の相手と再婚した。それからの十年間、彼女は幸せに暮らしている。

・ケース２：ある女は結婚以来、夫との不仲が続いており苦しい忍耐を続けていた。結婚からちょうど十年が経ってから二人の関係は徐々に成熟したものとなり、それからの十年間は幸せに暮らしている。

ケース１、ケース２ともに最初の十年がマイナスの価値をもっており、あとの十年間はプラスの価値をもっていることは共通である。しかし、二つのケースには無視出来ない違いがある。それはケース１にとって最初の十年間は損失 dead loss でしかないが、ケース２にとってはそれはある種の先行投資ないし幸せの基盤 foundation of happiness と解釈されるということである。集計主義はこの種の、結果によって先行する出来事の意味づけが変化するタイプの出来事の価値を上手く説明することが出来ないのではないだろうか。ヴェルマン的な生の形状の意義を強調する論者はこの点で集計主義に対する説明上のアドバンテージを主張するのである。

このような出来事間の関係から生じる意味の役割を強調する論者はしばしば好んで物語 narrative という概念を用いる。物語という概念は価値の領域以外でも現代哲学では次のような仕方で用いられる[3]。例えば、歴史理論の領域において、物語論者は過去に起きた出来事を「それが起こったときに、起こったように」書き留めるだけでは不十分であり、関連する出来事を一定の文脈になかに落とし込むことによって因果関係を理解可能なものにすることなしには歴史叙述は成り立たない、として極端な実証主義を斥けようとする［Danto 1965, 152］［Ricoeur 1983, 127-129)］。また、

3　現代哲学における「物語」という概念の特徴づけについては［高田 2017］を参照してほしい。物語 narrative とストーリー story はしばしば区別される概念であるが、本稿の文脈ではそれほど気にすることはない。

行為論の文脈においては、マッキンタイアの指摘のように、「卵を四つ割ってボールに入れる」「砂糖を混ぜる」「フライパンを温める」といった各行為記述の束はそれらを要素とする「オムレツを作る」といったより上位の階層に位置する行為を参照することによってしか意味をもたず、また「オムレツを作る」も何らかの文脈におかれることで理解可能になる、といったような発想もしばしば物語論的発想と呼ばれる［MacIntyre 1984, 206-208］。この二つの用法と同様に、生の価値について物語論者は、私たちが生の状態に関心を持つときに本当に気にかけているのは生のなかの異なる時点に生じた様々な出来事がある特定の観点のもとでまとめ上げられ、理解可能な形になった生の物語であり、その物語が私たちの生の価値を説明する、とする。このような意味で、生の形状説は一種の物語論としてみなされるのである。ここにおいて、福利のグラフとしての右肩上がりないし右肩下がりはそれ自体ではなんら当人の生の福利を説明するものではなく、当人の生の物語の徴であるに過ぎないということになる。

さらに、この解釈では活動と目的との関係を説明する点が強調されることある。次のような例を見てみよう［Kauppinen 2012, 348-350］。

- 純然たる幸福：苦難の幼少時代を送り、立身出世を夢みて努力していたが、あるとき遠縁の巨額の遺産が転がり込み、贅沢な生活をおくる人生。
- 懸命な努力：苦難の幼少時代を送り、立身出世を夢みて様々な努力を重ね、その甲斐あって重要な仕事を成し遂げて財産を得る人生。

もしこの二つの生に重要な違いがあると考えるならそれはどのようなものだろうか。アンティ・カウピネンによれば、それは（先のヴェルマンの例と同様に）自分の成功に対する過去の苦労の寄与の関係である。努力ゆえの成功という物語は、それを眺める当人にとって適切な充足と称賛の感覚を当人にもたらすだろう。そして、まさにそうした感覚こそが自らの生を

価値あるものとして表象することの源泉なのである。

先に述べたように、複数の出来事を特定の観点のもとで関連付けることによってその意味を理解可能なものとするのが物語論の基本的発想である。この発想を個人の生に適用するとき、達成や目的という観点に訴えることはそれほど不自然なことではないだろう。そしてこの意味で、生の形状説の物語的解釈は前節の「どちらの週末がより善い週末か」という問いを避けることができるようにも思われる。物語的な関係はあらゆる出来事の間で重要になるわけではない。それは典型的には容易に達成できない目的や理想を伴った比較的長期間の活動において見出されるものであり、その意味で「どちらの週末が自分の生にとって選ぶに値する週末か」といったことは「どちらを選んでもそれほど差はないだろう」と答えることが可能になるのである。

以上を踏まえて、生の形状説とはどのようなものかを簡単にまとめておこう。生の形状説とは、（1）私たちの生の価値は瞬間的に生起した出来事の効用の集計に尽くされるものではなく、（2）異なる時点に生起した出来事間の関係から見出される価値が決定的に重要であり、（3）その生を送る当人にとって選ぶに値するものがなにかを教えてくれる重要な要素である、ということになる。

4. 物語的解釈と意味の変化

以上で述べたタイプの生の形状説が福利の説明として適切なものなのかを論じる前に、ひとつ混乱の可能性を取り除いておこう。

物語的解釈を擁護する論者はしばしば「変化」について語る。先に見た苦難の果ての成功と苦難の末の失敗を比較するとき前者の苦難を幸福の基盤とみなし、後者を損失とみなすのはその苦難の変化の表現である。このとき注目すべきなのは、それはなんの変化なのか、ということである。次のような例を考えてみよう。ある男は恋人と良好な関係を築き、デート

やプレゼントの交換など楽しい時間を過ごしていた。しかしあるときその恋人は男の財産を持ち逃げしてしまう。彼女は詐欺師だったのだ。このとき、明らかにその男は幸福な男から不幸な男に変化したように思われる。それも、その楽しい時間が楽しかった分だけ不幸になるように思われる。

さてここで重要なのは、この不幸になった男について、恋人と過ごしたかつての時間を楽しんでいたそのときの当人にとっての良さが、裏切りという出来事によってキャンセルされた、あるいは負の価値に転じたと考えるのは一見して奇妙であるということである。後続する出来事によって過去の特定の時点で主体が得た福利そのものが変化することを説明するには価値論的にかなりの技術的困難が伴うだろう。福利の発生とはある事態の実現であり、過去の事態に未来の出来事が干渉するとは一般に考えられない。

これについてヴェルマンは「後に来る展開がある出来事の意味を変更するというとき、その後に来る展開というのは当人の人生の価値に対するその出来事の貢献に変化をもたらしうるのであって、その出来事がそれが生じたときにもっていた当人の福利のインパクトを遡及的に変更しうるものではない」［Velleman 2004, 68］と述べている。これはなにを意味しているのか。私の解釈は次のようなものである。

まず、例えとして「塞翁が馬」の故事を参照してみよう。塞翁の息子が落馬して骨を折ったことで得た負の福利と骨を折ったことで彼が徴兵を免れたことで得た正の福利は差し引きすれば正の福利の方が遥かに多い。したがって「落馬して骨を折り徴兵を免れた」という事柄にのみ注目するなら塞翁の息子は幸福である。これは集計主義的観点によっても十分に説明できるケースである。一方で生の形状説の物語的解釈は「徴兵を免れた」という後に来る出来事によって、骨折という出来事の意味が単なる損失ではなく「後の善さ」のための伏線ないし幸福の基盤へと意味が変化した、と考えるだろう。この際に「骨折したこと」が負の福利から正の福利に変化したとは考える必要はない。この事例の場合、集計主義的観点と生の形

状説的観点のどちらが「塞翁の息子が幸福であること」に適切な説明を与えているかと考えるべきではなく、異なる次元にある二つの別の説明と捉えるべきだろう。

「遡及的な意味の変化」という考えが独自の意味をもつのは、上記のような例ではなく「努力と達成」のような欲求の実現が問題になっているケースである。次のような例を検討しよう。

> ある芸術家は満足のいかない作品が世に出るのを良しとせず、長い間困窮にあえいでいた（期間 x）。しかし、その試行錯誤の末、ようやく満足のいく作品が出来上がり、彼女は芸術界から高い評価を受けた（期間 y）。

この例は集計主義者の観点からは次のように説明できるだろう。期間 x における彼女の経験は、期間 x における彼女に負の福利をもつという性質を付与し、期間 x において彼女は不幸であった。そして、期間 y における彼女の経験は、期間 y における彼女に正の福利をもつという性質を付与し、期間 y において彼女は幸福であった、と考えるのである。あとは期間 x における負の福利の度合いと期間 y における福利の度合いを差し引きすれば、期間 x＋y における彼女の福利が総合的に算定できるだろう。ここで大事なのは、この見方においては、負の福利をもつという性質を彼女が持っていた期間と彼女が不幸であった期間が同じであるということである（もちろん、正の福利の場合も同様である）。

しかし、これとは別の見方も可能である。期間 y において彼女が獲得した性質が「試行錯誤の甲斐あって、満足のいく作品を完成させた」という性質だとしたらどうだろうか。このとき、この性質が価値づけるのは期間 y における彼女の活動だけだろうか。この性質の獲得の影響範囲は期間 y における彼女の活動だけでなく、期間 x における彼女の活動も含まれると

考えてはいけないのだろうか[4]。

もしそう考えることが許されるとしたら、まさにこれこそが「意味の変化」の核心である。重要なのは、「苦労の末に成し遂げる」というタイプの性質をある人がもつことは、「苦労の活動」と「達成の（栄光の）活動」の双方に関係的な価値を割り振る、ということである。苦労の活動は達成の活動との関係によって価値づけられ、達成の価値も苦労の活動との関係によって価値づけられる。そして、私たちはこのような関係的価値を担う活動の連関から生を評価することがある、と考えるのが物語的解釈の主張なのである。

本節で確認したことは以下のとおりである。

生の形状説の物語的解釈は「後続する出来事によって先行する出来事の意味が変化する」といった説明を好んで用いる。ここでいう「意味の変化」はしばしば曖昧であるが、もし過去の出来事がそれが生じたときに持っていた福利のインパクトが変化するのだと考えると理論的な困難が生じるであろう。それを避けるためには、「意味の変化」とは先行する出来事の後続する出来事に対する貢献関係の成立だと解するのが適切である。

5. どのような価値が生の形状から見出されるのか

ここまでの探求で、生の形状説についてはおおむね三つの立場がありえることになる。一つは、右肩上がりに代表されるようなある期間内の福利の分配布置そのものが内在的な価値をもつと考える内在的解釈である。もう一つの立場は、努力と達成に代表される時間的に隔たった出来事の間の関係の意味を強調する物語的解釈である。そして三つめが、内在的な価値をもつものは各時点で得られた快苦に尽きており、生の形状は直接には

4　この説明の方法については生の意味についての whole-life と part-life の関係ついての［Yoshizawa 2015, 136］の洞察から示唆を受けた。

福利の評価に影響しないとする集計主義を基礎にした自然主義的快楽説である。ただし、自然主義的快楽説を過度に単純化してとらえる必要はない。フレッド・フェルドマンのように、私たちはある特定の時点において自分の過去の福利の分配布置になんらかの態度的快楽を抱くことがありうると考えれば、（内在的価値をすべて快苦に還元できるという点を除けば）自然主義的快楽説はかなりの程度内在的解釈のモチベーションを取り込むことできると評価することもできるだろう[5]。この三つを比較してみると、物語的解釈はかなり独特の含意をもつ立場であるといえる。そしてそれゆえに、もし生の形状説が価値の議論において独自の意義をもつとすればそれは物語的解釈によるものだということになるだろう[6]。

物語的解釈は「努力ゆえの達成」ということに私たちが見出している善さは達成によって実現されたこと（例えば快楽）の善さに還元できないと主張する。私は、こうした物語的解釈によって見いだされる出来事の関係の善さ、つまり物語的構造の善さはスキャンロンらが支持する価値の多元論によって説明できると考えている。どういうことか。

スキャンロンは「ある事態が価値をもつとは、その事態が実現または促進されるべきである」とする価値の目的論に反対して、価値づけ valuing の多元論を展開している。彼によれば、私たちの多くは友情に価値を見出しているが、それは単に「世界にはもっと多くの友情があるべし」と考えていることを意味しているのではない。私たちが友情を価値あるものと見なすとは、そのなかには友人に対して誠実であったり、友人と過ごしたりすることには善い理由があると考えることであり、ひいては人生を

5　これについては［Feldman 2004, 138-141］を参照のこと。

6　［Vitrano 2017］は福利の問題として生の形状説をみたとき、どのような解釈においても自然主義的快楽主義に比して説明上のアドバンテージがないと主張する。しかし、ヴィトラーノの物語的解釈の理解は本稿のものと大幅に異なる。以下に示すように、私の解釈では物語的解釈が説明しようとする価値は福利とは違う種類の価値である。

形成 shaping するにあたって友情という概念に重要な位置を与えることを肯定することを含んでいる。つまり、私たちが価値あるものと見なすものの多くは、その事態が実現ないし促進されるべきという以外にも、それを尊重した形での行為選択に結実したり、それが生を送るうえで重要であると考えることをも含んでいると考えるのである［Scanlon 1998, 88-90］[7]。

これと同様に、私たちが生のなかで価値があると考えているものは福利のように実現や促進の対象になるものだけではない。目的達成のためのさまざまな努力や試行錯誤、あるいは自らの過去を尊重することなども私たちの価値の領域の一部を形成しており、生の形状説の物語的解釈は福利に還元不可能なこの価値の意義を強調するのである。

このことは実践的には以下のことを示唆する。もし私たちが合理的な存在者であるのなら、私たちは現在従事している活動が未来において損失ではなく幸福の基盤となることを望むだろう。言い換えれば、私たちの現在の努力が目的の達成のために貢献することを望むだろう。そして、仮に自らの努力によって目的が達せられたなら、カウピネンの言うように、私たちは自分の生に対して適切な充足と称賛を得るであろう。私の考えでは、このことは「なにが私たちの生を意味ある meaningful ものにするのか」という問いの答えの候補となりうるものである。つまり、この立場においては、私たちの生を意味あるものにするのは、目的へと向かう努力とそれに対する自己への満足と称賛なのである。

結論

本稿での私の提案は、生の形状説は個人的な善としての人生の意味の理論として解釈されたときにその有効性を発揮する、というものであった。

7　スキャンロンの価値理論については［岡本 2018］に簡便かつ適切な解説がある。とりわけ「促進」の対象となる価値とそれとは異なる価値のあり方の説明について、本稿でもこれに多くを負っている。

人間の個人的な善の理論は必ずしも福利の問題に尽くされるわけではない。ある特定の時点での個人の活動が生全体のなかで意味あるものであるためには、それは未来の活動や状態に貢献するものでなければならない。そして、成し遂げられた目的や得られた状態の価値はそれに貢献した過去の活動を意味あるものにするのである。このような相互に価値づけあう出来事同士の関係が個人の生全体の意味を形作っているのであり、生の形状説の物語的解釈はこれを説明する良い方法を提供しているのである。

もちろん、これは一つの提案を概略的にスケッチしたものに過ぎない。努力や自己称賛といったものは個人の内部的見方にとって重要であるにすぎず、生の意味は個人の活動が世界全体にどれほどのインパクトを及ぼしたかに尽きるとする考えを支持することもまた可能ではある。本稿でその論争に立ち入ることはできない。しかし、仮にそうでない見方――主観説や混合説――を取り、その内部的見方の意義を説明しようとするなら、本稿が行った議論は意義をもってくるだろう。

参考文献

Dorsey, Dale (2015). “The Significance of a Life’s Shape.” *Ethics* 125 (2): 303-330.

Danto, Arthur Coleman (1968). *Analytical Philosophy of History*. Cambridge U.P..

Feldman, Fred (2004). *Pleasure and the Good Life: Concerning the Nature, Varieties and Plausibility of Hedonism*. Clarendon Press.

Kauppinen, Antti (2012). “Meaningfulness and Time”, *Philosophy and Phenomenological Research* 84 (2): 345-377.

MacIntyre, Alasdair C. (1984). *After Virtue: A Study in Moral Theory.* University of Notre Dame Press.

Nozick, Robert (1989). *The Examined Life: Philosophical Meditations*. Simon & Schuster.

Ricœur, Paul (1983). *Temps et Récit*, Tome I. Seuil.

Scanlon, Thomas (1998). *What We Owe to Each Other*. Belknap Press of Harvard

University Press.

Temkin, Larry S. (2012). *Rethinking the Good: Moral Ideals and the Nature of Practical Reasoning*. Oxford University Press.

Velleman, David (2000). *The Possibility of Practical Reason*. Oxford University Press.

Vitrano, Christine (2017). “What Does the Shape of a Life Tell Us About Its Value?”, *Journal of Value Inquiry* 51 (3): 563-575.

Yoshizawa, Fumitake (2015). “Death and the Meaning of Life: A Critical Study of Metz’s Meaning in Life”,in Morioka, Masahiro (ed.) Reconsidering Meaning in Life: A Philosophical Dialogue with Thaddeus Metz. *Journal of Philosophy of Life*, Waseda University: 134-139.

岡本慎平 (2018)「T. M. スキャンロンと価値の責任転嫁説明　「理由への転回」の里程標」、『フィルカル』、第 3 号第 1 巻：42-80.

高田敦史 (2017)「ストーリーはどのような存在者か」、『科学基礎論研究』、44 号（1・2）：35-53.

（ながと・ゆうすけ　慶應義塾大学文学部非常勤講師）

The Shape of Life Hypothesis as Value Pluralism

Yusuke NAGATO

The shape of a life hypothesis is often brought out in the philosophical debate of the value of a life. This hypothesis is famous for what R. Nozick has shown in a very intuitive way. The simplest form of the shape of a life hypothesis is “lives are better when they have an upward, rather than downward, slope in terms of momentary well-being, even if both lives have the same amount of well-being”.

Advocates of this hypothesis have attempted to oppose simple aggregation possibilities of well-being and hedonism by appealing to this intuition. They argue that hedonists are looking very naive about the relationship between well-being and time, therefore ignoring the problem of intralife aggregation. However, as I see it, the detail of this argument is often ambiguous. Why can this hypothesis be a counter to hedonism? How does this hypothesis change our beliefs about good life?

This paper aims to provide clues to answer such questions. To begin with, I will present two interpretations about the shape of a life hypothesis and try to emphasize the difference in its main points. The first interpretation, so-called “the Intrinsic interpretation”, says that the distribution pattern of momentary intrinsic benefits within a life is intrinsically valuable. The second interpretation, so-called “the Narrative interpretation”, focuses on the narrative structure of temporally discrete events as seen between effort and achievement. The latter interpretation leaves more room for explanation. Hence, I will take the Narrative interpretation seriously and consider the unique explanation of the alteration to the meaning of an event. Finally, I will propose that the narrative interpretation defends pluralism of value and it is a powerful argument that can lead to discussions of values other than well-being, such as the meaning of life.